横浜ナザレン教会2020・聖霊降臨節第八主日礼拝
「父の愛のもとへ」ルカ福音書 15:11～32

【聖書】
ルカ福音書15:11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟
の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をく
ださい』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もた
たないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放
蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14 何もかも使い果たし
たとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15
それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を
畑にやって豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹
を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は
我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余る
ほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 ここをたち、父のと
ころに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対
しても罪を犯しました。19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一
人にしてください」と。』20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。とこ
ろが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り
寄って首を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対
しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格は
ありません。』22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を
持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせな
さい。23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この
息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったから
だ。』そして、祝宴を始めた。
25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめ
きが聞こえてきた。26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと
尋ねた。27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えた
というので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28 兄は怒って家に入
ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29 しかし、兄は父親に言った。『こ
のとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたこと
は一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山
羊一匹すらくれなかったではありませんか。30 ところが、あなたのあの息子が、
娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛
を屠っておやりになる。』31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわた
しと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32 だが、お前のあの弟

は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

1　父の愛の物語

私達が、先週に引き続き今朝与えられた聖書の御言葉は、多くの人に愛されてきた物語であり、色んな名前で呼ばれています。「放蕩息子の譬え」、「失われた息子の譬え」などなど。あるドイツの新約学者は、寧ろ「**父の愛の物語**」と呼ぶべきだと言ったそうです。この譬えを学べば学ぶほどに、この物語の主人公は二人の息子ではなく、父だと思われると言うのです。その通りだと思います。オランダの画家レンブラントは、一生の間に何度かこの絵を描いたのですが、描けば描くほど、放蕩息子を迎える父親に力を入れて描くようになったそうです。彼もまた、この物語を読めば読むほど、味わえば味わうほどに、父の愛の姿が大きくなってきたのです。それはまるで信仰者の一生のようです。信仰者としての戦いは一生続きますが、私達はその信仰の戦いを通じて成長していきます。成長してどうなるかと言えば、自分の中で父なる神の姿がだんだんと大きくなっていきます。人生の様々な喜び悲しみを経験していく過程で、この譬えの中で父に託して主イエスが語られた、父なる神の愛がぐんぐん大きくなり、深くなり、確かなものとなる、それが、私達信仰者に与えられている幸せな人生の歩みだと思います。

2　失われた息子の物語

　しかし、それだけに「神の愛の物語」に現れるふたりの息子の姿も、また深みを増してきます。ですから、この譬えは「父の愛の物語」であると同時に「放蕩息子の物語」「失われた息子の物語」でもあります。ただ、私達、「失われた息子の物語」という時、次男坊の話だと考えてしまうのですが、昔から、「二人の放蕩息子の話」とか「もう一人の放蕩息子の話」という題もつけられてきました。ここに出てくる二人とも父に背き、二人とも父から遠く離れてしまった息子です。後半はその兄が登場します。私は読めば読むほどに、主イエスはこの兄の方の話しをしたくて弟息子の帰還を描いたのではないかとさえ思えてきました。

　人生の優等生のような兄。父の言うことをよく聞き、従ってきました。心配をかけるような事は何一つしなかったのです。主イエスは、この兄の姿に、ファリサイ派や律法学者達の姿を重ねています。その頃、主イエスと敵対し始めていた人々です。神の掟に忠実に生きた人々。自他ともにそのように評価する事ができた人々であり、優等生、模範生です。弟は勿論、落第生。父親の言う事には耳を傾けず、さっさと家を飛び出してしまったのです。働く事よりも、遊ぶ方を愛した弟でした。主イエスは、この弟には、徴税人や罪

人と呼ばれる人々の姿を重ね合わせているのは確かです。兄と弟、私達はこの二人を分けて考えがちです。確かにこの二人は明らかに違いますが、私達は神との関係において、時に弟になり、時に兄となる事があります。ですから、二人をいつも合わせて理解しなければならない側面があるのだと思います。

3　フォン・ラート

この譬え話について、ドイツの旧約学者のフォン・ラートという方が次のように説教しているそうです。「これは愛の物語である。その通りだ。しかし、この神の愛を、私達は、よく理解しているだろうか。それとも、この物語の一番大事なところを気づかぬままに通り過ぎるような読み方をしていないだろうか。」「ここに兄がいる。この人は、この父親の愛の物語を、その一部始終を、最も身近なところで経験したのだ。「しかも、何も判らなかった。神の愛のAからZまで、とうとう分からなかったのだ。そこで我々は考える。『この兄は、それほど鈍感で、冷たくて非人間的な人間なのだ』と。そして更に思う、『我々は違う。我々はこの物語が語っている神の愛がよく判る人間だ』と。果たしてそうだろうか？」「それどころか、この兄は、おそらくとても心の細やかな、神経のぴりぴりした、感じやすい人ではなかったか。だから彼は、我々が殆ど感じ取ってもいない、この父の愛をよく知っていたに違いない。ただ彼は、それにつまずいた。彼は自分の流儀でしか、父の愛を判断できなかった。だから、腹を立てた。」

確かにラート先生の言うように兄の姿は私達の姿と重なります。考えてみてください。自分が兄の立場で同じ事が起こったとしたら。弟が思っていたように、彼を召使の一人として家に置くとしたら、兄も受け入れる事もできたでしょう。しかし、この父親は、さんざん好き放題した弟に最も良い晴れ着を着せ、上等の履物を履かせ、それだけでなく、印鑑付きの指輪まではめてやっている、更には子牛を屠って祝いの宴まで！私達の誰が父親のこの非常識な溺愛ぶりを見て平静でいられるでしょうか。心の底から弟の帰還に大喜びする父の愛を受け入れる事ができる人がいるでしょうか。「それはスジが通っていない！」と抗議の声をあげるでしょう。

心を怒りでわしづかみにされる時、私達は考える必要があります。何故、これほどまでに放蕩の限りを尽くした弟は迎えられたのでしょうか。父が弟を愛したから、父が彼の帰還を喜んだから。他に理由はありません。そして、父はそれ以外になすべき道を知らなかったのです。この弟が父の子として生まれ変わるのも、そのような愛によって受け入れられる事以外にはありえません。

人間にとっては到底考えられない事です。ですから、父なる神の愛というのは、人間の考える正義公平の原則、正当な報いの原則などというようなものを吹き飛ばす愛と言えます。不当なほどに、主イエスの父なる神は、人を愛され

る、私達を愛されるのです。その意味では、神が私達に、御子キリストを与えて下さる愛は、公平を欠いたものです。少なくとも、兄が、私達が理解する正しさの原則を破っています。

しかし、もし神が本当に公平に、神としての正義の原則を公平に貫いたなら、私達は誰一人として生きていけなかった、父の子である事ができなかった事は確かです。兄もそうです。彼の心もまた父のもとをさまよい出ていたからです。

4　奴隷のように

兄の言葉から分かります。29節です。なだめる父に対して、兄がこう言っています。「**このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。**」この「仕えて」という単語は、聖書によく出てくる「仕えて」という言葉、例えば、「キリスト者が主に仕える」という時に用いる「仕える」とは違う単語です。「奴隷として仕える」という特別な意味を持ちます。この兄が、これまでの父親に孝行を尽くし忠実に生きて来た生き方を、父親の前で自分の「功績」として語ろうとする時、「**わたしはあなたの奴隷だった**」、「**わたしはあなたに奴隷として仕えてきたのだ**」とはっきり言ってのけたのです。もっといくらでもいいようがあったでしょう。しかし、兄はそのように生きて来たから、そのようにしか言えないのです。この言葉を聞いた時の父親の悲しみを思います。

しかし、神を神とする、神を信じるという事は、神を恐れ、奴隷のごとく神に服従して生きるという事ではありません。全く逆です。神を心から愛することです。神に対して奴隷のようにびくびくする想いを抱き続ける事ではなくて、神の子として、父なる神を信頼し、愛し抜いて従い、仕える事です。自由のない所に愛もまたありません。父なる神に従う事は奴隷の不自由さを意味しないし、父なる神との関係は冷たい関係ではありません。実際に教会は、この点を誤解して様々な決まりを決めて不自由な信仰生活を強いたこともありました。しかし、それは神の戒めを勘違いしてしまい、ファリサイ派や律法学者の罪に戻ったにすぎなかったのです。

5　十戒

神の戒めの代表例が先ほど交読文で読み交わした十戒です。私達はあまり十戒を唱える事がありませんが、宗教改革者・カルヴァンの教えを大切にする改革派の教会では、使徒信条、主の祈りに加えて、十戒を毎週の日曜礼拝ごとに唱える教会もあるようです。先ほど読み交わした出エジプト20章、日本語の翻訳では、「◎◎してはならない」や「◎◎せよ」と命令形で訳されてい

ますが、原語のニュアンスは随分と違う…という事は、皆さんも聞いた事があると思います。この十戒は、「神の民は、◎◎しない」「神の民は、▽▽する」と訳した方がいうようなニュアンスだそうです。今日の文脈からだと、「神を愛する者は、盗まない」「神を愛する者は、安息日を聖別する」と言えるでしょう。神を愛することが先にある、そして神の戒めには、その愛の結果が述べられているというのです。私達は神を愛して初めて神の戒めを守る事ができるのです。

しかし、私達の方から始めて神を愛することは出来ません。自分が神に深く愛されるその愛を深く知る経験を繰り返す事によって、私達は神を愛することができるのです。律法を守る人が神に愛されるのではないのです。神に愛されている事を知って初めて私達は神の律法を守る事ができる者とされていくのです。

6　父の家の外に

しかし、この途方もない父の愛を私達はどうやって知る事ができるのか、実感できるのでしょうか。兄は長いあいだ父親の傍らにいたのに、父の愛を理解できなかったのです。28節にその答えがあるように思います。「**兄は家に入ろうとしなかった**」。兄は自分の思いに囚われて、父の家に入ろうとはしませんでした。父親の愛に飛び込もうとしなかったのです。神の愛というのは、そこに飛び込まねば、本当に知る事ができない愛です。

このように言って思い出すのは、ある方のエフェソ3：18の解釈です。エフェソ3：18とは「**また、あなたがたがすべての聖なる者達と共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解しますように。**」前にもお話しした事がありますが、ここを読んだその人は、不思議に思ったそうです。「ふつう大きさを表す時には、長さ、高さ、深さの三次元だ。それなのに、ここでは、長さ・高さ・深さに加えて、『広さ』とある。この広さとは何なのだろう。」ずっと考え続けて、ある時閃いた。「そうだ、このエフェソ信徒への手紙を書いた人は、キリストの愛の中に既に飛び込んでいるんだ。そしてぐる～りと辺りを見渡している。そして『なんて広いんだ』『本当に長いなぁ』、『すごく高いなぁ』、『あぁ、奥深いなぁ』と感嘆している」と。巨大な建物の大きさは、その中に入らねば、外から見ているだけでは実感する事ができません。神の愛もそれと同じ。その途方もない愛の広さを知るには、神の愛の内に飛び込まねば分からない。自分の外に出て神の愛に飛び込んだ時に初めて分かる、神の愛を実感するのです。この兄は、長らく父の傍らにいました。しかし、父の愛に飛び込む事はなかったのでしょう。父に思い切ってぶっつかっていく事がなかった、「父さんの想いはこうに違いない」と自分の考えの中にいた、だから、父の愛は全く分からなかったのではないかと思います。神の愛が分からなければ、本当の自分の姿も判りません。これは想像ですが、弟息子が家出をしたその日から

父親は弟のことをかたときも忘れる事なく、ずっと待ち続けたのでしょう。ですが、長男の事も忘れたわけではなく、深く愛していました。長男と共に働き暮らす事、財産を分け合う事に大きな喜びを覚えた父親だったでしょう。しかし、その喜びが深ければ深いほど大きければ大きいほど、自分の傍らにいない弟息子の事が思われたのではないでしょうか。けれども、傍から見ている長男には、弟だけを想って悲しんでいるように見え、嫉妬を増していたのかもしれません。兄は、父と向き合い父に自分の気持ちをぶっつければ分かったのかもしれません。が、兄はそうしませんでした。そして、自分の正しさを父に見せつけるように、黙々と父親の言葉に従い働く、そうするうちに、彼の心は父親から離れていきました。体が近くにいるのに、心が離れている。なんと寒々しい事でしょうか。父なる神から離れた時、私達は心が頑なになり凍てつく孤独の寒さの中に立ち尽くす事になるようです。

7　慰める父

父の愛から遠く離れて一人寒々しい孤独に生きる兄の為に、父は歩み寄ります。「家から出て来てそして、なだめた」と主イエスは語ります。この「なだめる」と訳されている言葉ですが、「慰める」という意味があります。父は、兄を慰める為に出て来たのですが、その慰めを兄は拒否します。しかし、子である兄に拒否されても、父なる神は変わらず、この慰めの思いに立ち続け、言います。「**子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。**」と。そうして、ご自身の喜びへと招かれるのです。「**だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。**」ー「兄よ、あなたも喜んでくれ、私の喜びを分かち合ってくれ、そうする事であなたも私の傍らにたつのだから。喜びを共にすることによって、あなたもこの弟と一緒に、わたしの懐に帰る事になるのだから。」「息子よ、あなたにとって、私の懐以外に生きる所があるのか、ここに生きる時にこそ、初めて私のものは全部あなたのものという約束が実現し、あなたは本当の自由になれるのではないか。ここ、私の懐の内こそ、あなたが私の子として生きる場所ではないのか。」父は、このようにして父の所からとても遠い場所に行っていたもうひとりの放蕩息子を招き続けています。私達を招き続けています。

8　共にいる

私達は、この父なる神の御許で神の愛の内に飛び込んでこそ、隣人と共に生きる事ができるのだと思います。25節に「**兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。**」とあります。父親が弟息子の帰還を喜び奏でさせたのでしょう。ここで「音楽」と訳されているギリシャ語は、

「スンフォニア」。この「スン」は「共に」という意味の言葉、「フォニア」は、「音」あるいは「響き」を意味します。音楽に詳しい方ならピンと来たと思いますが、「シンフォニー、交響楽」という単語のもとになった言葉です。交響楽は百人が演奏しようが、二百人がそろって歌おうが、一つの響きです。父なる神は、ご自分の愛の響きに共鳴する響きを奏でるように、兄と弟にお求めになっているようです。そして、私達にもお求めになっているのだと思います。主旋律は父なる神が失われた子どもを見つけ出した溢れんばかりの喜びです。天の喜びの歌です。父なる神は、私達と共にこの喜びの歌とひとつの調べとして奏でたい！と願っておられます。

9　主イエスの十字架

この二人の息子の物語は、ここでは終わっていません。兄が父の招きに応じて家の中に入り祝宴についたかどうかは、譬えの中では語られていないからです。この物語続きはどこにあるのでしょうか。一つの続きは、ルカ福音書16章以降と言えるでしょう。結局、兄に譬えられたファリサイ派や律法学者達は、主イエスの語る父なる神の愛、途方のない愛を受け入れる事ができなかった、我慢できなかった。自分達の考えを通して、途方もない神の愛そのものである主イエスを十字架にかけて殺してしまいます。そうして自分達の良心を満足させました。

先ほどのフォン・ラート先生はこう言っています。「**キリストが来てくださったこと、それは本当に不思議なこと、最も不思議なこと。主イエスは、私達を私達自身の良心からも守るために来てくださった。**」繰り返します。「**主イエスは、私達を私達の良心から守るためにも来てくださった。**」驚くべき言葉です。主キリスト・イエスは、私達が自分たちの良心を出て神の愛のうちへと飛び込む事ができる為に来てくださいました。

10　神の愛の物語の終わり

だからこそ、この物語はまだ終わっていない、律法学者やファリサイ派の人々の拒絶では終わっていないのです。御子イエス・キリストは三日目に甦られたから。そして、父なる神の御許に帰った後も、聖霊なる御神を通じて、この兄を、私達を招き続けてくださっています。自分達の場所から出て父なる神の御許に帰れ！と招き続けています。私達は、この招きに応え、自分の思いを投げ捨てて父なる神の愛の中に飛び込んでいきたい、共に喜びの響きをあげて、神を賛美したいと心から願います。